International Development Center of Japan
国際開発センター

ドイツと日本の若者を繋ぐ
～日独ヤングリーダーズ・フォーラムに参加して～

読者のみなさんは、「ドイツ」と聞いて何を思い浮かべるだろうか。サッカー、ビール、ベルリンの壁、最近では難民の受け入れ問題などであろうか。国際開発業界で働く人の中には、ドイツ国際協力公社を連想する人もいるかもしれない。筆者はこれまでドイツに馴染みがあるわけではなかったが、2015年９月上旬の10日間、東京で開催された「日独ヤングリーダーズ・フォーラム」に参加する機会を得た。

この日独ヤングリーダーズ・フォーラムは、日本とドイツの若手人材（25～35歳）の交流と日独関係の強化を目指し、ドイツ有数の民間企業財団であるロバート・ボッシュ財団から資金提供を受けて開催されるプログラムであり、日本とドイツの外務省、ベルリン州政府の支援を受け運営されている「ベルリン日独センター」が主催している。2006年に開始されて以来、年に一度、その年のテーマごとに各界から著名な専門家や有識者を招いて日本とドイツで交互に開催されており、合宿形式で講義や討論が行われたり、関係機関や企業への視察も行われている。今年のプログラムには、メーカー、経営コンサルタント企業、官公庁、国際機関、研究機関など、さまざまなバックグラウンドを持つ両国の若手人材が８人ずつ参加した。

今年のテーマは、「東アジアとヨーロッパの地域の安定と協力」。日本が、尖閣諸島や竹島の領有権争いをはじめとする日中・日韓関係における問題や、日米間の安全保障体制をめぐる問題など、東アジア地域の安定を揺るがしかねない多くの課題を抱えているのと同様に、ドイツをはじめヨーロッパ地域にも、ウクライナをめぐる欧州連合（EU）とロシアの関係、難民問題、ギリシャ財政危機など、さまざまな課題がある。今回のプログラムでは、まず、ファシリテーターを務める英国ウォーリック大学のクリストファー・ヒューズ教授がわれわれ参加者に対し、こうした地域の不安定化や地域内で発生する紛争の裏にはどのような背景があるのか、どのようなアプローチでこうした課題を解決していくべきか、その中で日本とドイツが果たし得る役割は何か、といった問いを投げ掛けた。これを受け、16人の参加者たちは、このテーマをより具体化した４つのサブテーマに従ってグループに分かれ、それぞれに深い知見を持つ研究者や実務家からレクチャーを受けた後、一日数時間にわたりグループ内で議論を重ねた。さらに、こうした議論で得られた成果を最終のプレゼンテーションとして発表したほか、今回のテーマに関連性が高い機関として、EU日本代表部と防衛省を訪問した。

EU日本代表部にて記念撮影

このプログラムには産官学から多様な人材が集まっており、参加者全員が必ずしも提示されるテーマに精通しているわけではなかった。そのため、あるテーマに対して精緻な答えを探ることより、むしろ互いの文化や価値観の違いを尊重しつつ、各々の経験や考え方に基づいて英語で議論を繰り返すことを通じて徐々に信頼関係を醸成していくというプロセスを学ぶことが一番重視されていた。筆者も、さまざまな経験を持つ同世代の参加者とともに、10日間、寝食を共にしながら討論や交流を重ねたことで、彼らと友情や人脈を育むことができた。こうした経験は、今後の業務の上でもかけがえのない財産になると感じている。また、筆者はこのプログラムを通じ、日本とドイツがどちらも敗戦から復興を遂げた民主主義国家である点や、国際社会の中で責任ある役割を有する立場にある点、類似した労働倫理が根付いている点などから、両国が多くの価値観や行動倫理を共有していることを実感した。さらに、両国がお互いにとって重要なパートナーであることを改めて認識するとともに、グローバルな課題が山積する国際社会に対していかに貢献していくべきか考える良い機会となった。このプログラムは、来年、ドイツで開催される予定だ。今回、筆者に参加する機会を与えて下さったロバート・ボッシュ財団とベルリン日独センターに対して感謝申し上げるとともに、関心のある方には、ぜひとも、来年参加されることをお薦めしたい。

（文責：国際開発センター　経済社会開発部研究員　山田 祐美子）